

巻頭のご挨拶

一般社団法人 北海道林産技術普及協会
会長 高橋 範行



会員の皆さま、新年あけましておめでとうございます。2020年の新春を会員皆さまとご一緒にお慶び申し上げます。

「隈研吾先生と涌井史郎学長による特別対談」。年末、このようなタイトルを目にしました。隈研吾氏とは、言わずもがなでしょうが、新国立競技場（オリンピックスタジアム）の設計者です。また、そのカタカタ名が話題を呼んだ高輪ゲートウェイ駅（新品川駅）の設計者でもあります。木材を使った特徴的な建築物もたくさん手がけられています。その隈氏は、岐阜県立森林文化アカデミー（以下、岐阜アカデミー）の特別招聘教授を勤められています。隈氏の対談の相手である涌井史郎学長は、1971年開校の岐阜県林業短期大学をルーツとする岐阜アカデミーの現学長です。岐阜アカデミーは、林業・林産業の現場で働く人材を育成する2年間の林業専門学校です。お二人の対談は、岐阜アカデミーに通う学生に向けた特別授業として行われたものです。

岐阜アカデミーのホームページを更に読むと、隈氏は岐阜アカデミーの学生が設計・施工する木造建築物に対する指導もされています。世界的な建築家で、抜群の知名度を持つ隈氏の講義を生で聞き、直に指導を受ける一学生にとっては大きな刺激を受ける機会になり、そして、木材や木造建築物の魅力にいつそう夢中になるに違いありません。岐阜アカデミーの連携担当職員からは、高校卒業程度の学生を対象とするエンジニア科の今年の定員は一次募集でほぼ埋まった、と聞きました。また、「外部講師をお願いしている民間の先生方の発想は、県庁（お役所）の決まり事を外れることも少なくなくて」と苦笑していましたが、実際にはその苦勞を楽しんでいるようにも感じられました。ただし、これまで常に順調だったわけではなく、何度も定員割れの期間があった、とも聞きました。試行錯誤を繰り返し、苦戦する場面もありつつ、林業・木材産業の、地域の、そして学生の期待に応える機関として成長したのだろうと想像します。

さて、我が北海道の林業大学校一道立北の森づくり専門学院（北森カレッジ）一が今年の4月に開校となります。少し早いですが、まずはお祝いを述べたいと思います。この間、さまざまな立場、考えによる意見・注文・叱咤激励があったことでしょう。私も、普及協会会長として、もの作り企業の社長として、北森カレッジに対するやや辛めの意見—もの作り教育にも、もっと力を入れて欲しい—を述べたことがあります。当協会に多いもの作り企業で活躍できる人材育成に対する期待が強くあるからです。岐阜アカデミーは、森と木のエンジニア科、となっていて、林業だけではなく木材産業の現場に即応できる人材の育成が行われています。北森カレッジには100名を超える外部講師が協力すると聞いています。隈氏に負けない魅力ある講義にふれ、もの作りのおもしろさを学んだ学生達が、2年後に、そしてその先においても木材産業に加わってくれることをたのしみにしています。

今年の当協会の通常総会は、4月17日(金)の開催を予定しています。総会後の講演会の講師には、(株)竹中工務店木造・木質建築推進本部副部長、小林道和氏をお招きします。(株)竹中工務店の木造・木質建築推進本部では、「木のイノベーションで森とまちの未来をつくる」をミッションに、建設分野での木材利用による循環型社会の実現を目指しています。これまで、4階建て木造商業施設（横浜市）、日本初の10階建て木造マンション（仙台市）、延べ面積約2万4500m²の混構造小中学校（東京都有明）、CLT+鉄骨ハイブリッド構造オフィスビル（神戸市）など、先駆的な木造建築物の実現に取り組んでいます。これら建築物における木材の使用事例は、私たちが木質建材の開発や非住宅建築物で木材利用を進めるための大きな参考になるに違いありません。

今年、林産試験場は林業指導所が1950年に開設されて70年目の年となります。そして、道立試験場から独立行政法人に移行して11年目、第2期を終え、第3期を迎えるとも聞いています。さらに、上に述べた北森カレッジが開校します。ひとつの節目の年であり、新たな発展・展開が期待されます。当協会は今年も林産試験場と企業の架け橋として、木材加工技術の向上とその普及に向けた活動を進めて参ります。皆さまのご支援・ご協力を心からお願い申し上げます。